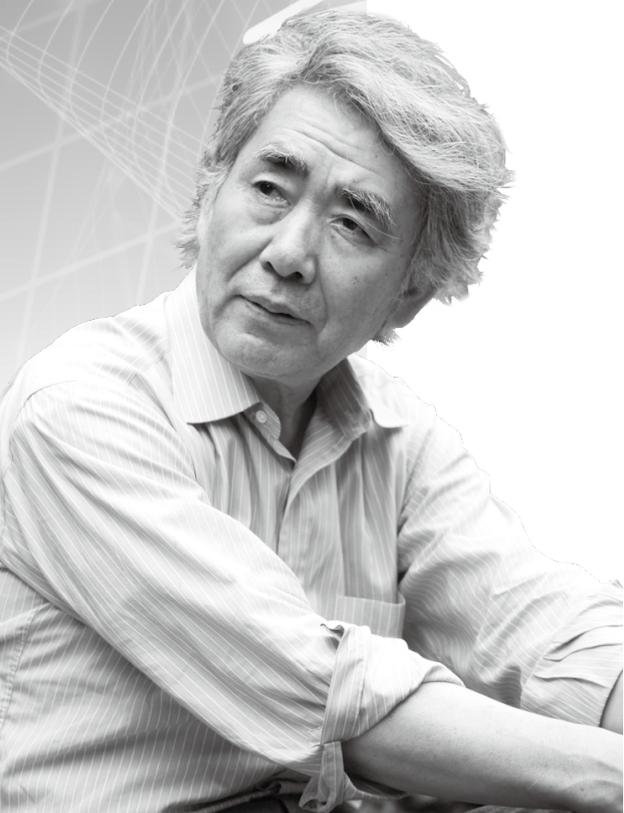


学術の風景

Vol. 29

私のささやかな挑戦 —— 短期間でも大学院生を 海外に送り出す



永田和宏

コロナ禍でほとんどの国際学会が開かれないままに3年が過ぎたが、今年になって徐々に戻りつつあるようである。私の専門は、細胞内でのタンパク質合成の分子機構、特に分子シャペロンによるタンパク質の合成と、その細胞内品質管理機構に関するものであるが、この分野のミーティングがアイルランドで開かれ、久しぶりに出席をし、話をして帰ってきたところである。

これまでアイルランドには行ったことがなく、それが引き受けた大きな理由だが、長く会うこともなく過ごしてきた旧友たちとの再会が、大きな楽しみであることは言うまでもない。従来なら、年に二度か三度は、世界のどこかで顔を合わせていたものだ。ほとんどの学会がZoomに替わり、直接話をするこのないままに3年などというのは、この30年、ほとんどないことであった。

やっぱり直接会うのはいいなあなどと言いながらビール片手に多くの研究者と旧交をあたためることになった。いろんな話に花が咲いたが、そこでも少し話題になった、若手の研究者を海外に出すことの意義について、少し私の経験を書いておきたい。

京都大学にいた時代はずっと研究所暮らしであった。結核胸部疾患研究所、胸部疾患研究所、そして再生医科学研究所と順に名が変わった。学生が来るのは、大学院の修士課程からである。

京都大学出身者も他大学出身者も区別なく受け入れていたので、学内と学外から受け入れた学生の数はいつもほぼ同数くらいだっただろうか。

ある時から、修士課程の大学院生として入ってくる彼らを、私の研究室で研究を始める前に、海外の研究室に3カ月間だけ派遣することにしたのである。強制ではなく、希望者を募るのであるが、ほとんどの学生が喜んで行きたいと言う。研究生活を始める前に海外を経験させるというのがポイントである。

引き受けてくれる先は、いきおい私の交友の範囲でいい研究をしているラボにお願いするということにならざるを得ないが、学生のやりたいことの希望

プロフィール

永田和宏 (ながた かずひろ)

JT生命誌研究館館長、京都大学名誉教授、

京都産業大学名誉教授

専門：細胞生物学

を聞き、それに該当するラボをいくつか紹介して、論文をいくつか読ませ、自分で選択させる。そのあと私からそのラボに打診するのであるが、思った以上にどの研究室も快く受け入れてくれたのには驚いた。サマースチューデントの感覚なのだろう。そんなふうに毎年一人か二人を送り、それが十年ほど続いたであろうか。

ラボの選定には、他に日本人が働いていないという点には注意をした。つまり英語でとにかく先方のポストと話をし、何をやりたいか、何をやらせてもらえるのか、なんとか自分ひとりだけの力でやって来いというわけである。一種の武者修行のような感覚か。

仕事のテーマはこちらからは与えないし、何をやってもオーケー、成果がでなくともよろしい。それには私のひそかな目論見があったのだが、3カ月して帰ってきた彼らは、見事に研究に対するモチベーションが違った顔付きをして帰ってきたものだ。しめしめというわけである。

とにかく下手な英語でも、なんとか聞き取り、自分の考えを伝えるということ。サイエンスの基本であるディスカッションを英語で行うことにヘジテイトしない学生を作ること、そして多分それ以上に大切なことは、日本という小さな片隅で自分たちがやっていることは、世界的な雑誌で論文を読んでいる〈あの有名な〉ラボと少しも変わらないじゃないか、つまり自分たちは文字通り世界の最先端で仕事をしているのだと自覚してもらうこと。この二つが私の願っていたことなのである。そして、派遣した多くの学生が、まさにその二つを得て帰り、そのあとの大学院生活5年間に活かしてくれたと思うのである。

年に一度、新入生を送り出し(!)、彼らが帰って来たその都度、本気になって研究に向かおうとする顔を見られることは、研究室全体にも大きな効果をもたらしていたと思っている。誰もが今いる自分の場を、世界のなかに据えて研究生活を送るのが当然

という雰囲気醸成が醸しだされるようになった。

なかには幸運な学生もいて、3カ月の間に新しいテクニックを身に付け、帰国後修士課程2年のあいだにScience誌に論文を一報書いた学生もいたが、多くは、自分も世界に伍してやっていけるとい、そんな自信だけは間違いなく得て帰り、それが私の研究室の大きな活力になっていたと今にして思う。

私は、送りだす時にいつも言っていた言葉があった。「もし、向こうが気に入ったら、別に帰って来なくてもいいからな」というのがその言葉であった。もちろんほとんどの学生は3カ月経って戻って来たが、その間、一人だけ、私のその言葉を実行してしまった学生がいた。

立命館大学から私の研究室に入った石川善弘君である。彼は米国、シアトルのコラーゲンを研究対象としているラボを希望し、出発した。3カ月後、彼から連絡があり、もう3カ月延長してもらえないかという。おもしろい!とすぐにオーケーを出したら、6カ月後、今度は先方の教授から「金はこちらで出すのであと1年延長してくれないか」。これには驚いたが、もちろんこちらの望むところでもあり、即オーケー。

彼は結局、修士課程の2年間をアメリカで研究を続け、修士論文を書くために3カ月ほど日本に戻ってきた。修士論文の発表が終わると、「また、行ってきます」と当然のごとく日本を発ったのである。

結局、博士課程の3年を更にシアトルで過ごし、私のラボで博士論文を取ってからは、ずっとまたアメリカ暮らしである。現在はUCSF(カリフォルニア大学サンフランシスコ校)の助教をしているが、どこか日本人離れした風貌になり、自由に楽しく研究を続けているようである。

彼は将来、日本に帰ってくるのか、どうか。ある意味、私は彼の人生にかなり大胆な石を投げ入れたことになるのであり、責任はあるのであろうが、はじめの目論見通り、そんなヘンな学生が一人でも現れてくれたことは、私のひそかな誇りでもあるのである。